

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	黄 萍
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 「甘え」に関する言語・倫理学的研究			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教 授	衛藤 吉則	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教 授	後藤 弘志	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教 授	高永 茂	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	准教授	後藤 雄太	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	名誉教授	松井 富美男	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、日本人の心理特性と深い関係がある「甘え」に焦点を当て、言語分析ならびに倫理学的考察を通してその心理や人間関係の構造を解明したものであり、序章と第一部「甘え」の言語的考察、第二部「甘え」の倫理的概念に関する考察、第三部「甘え」の倫理学的意義と結章からなる。</p> <p>序章では、土居健郎の「甘え」論を分析することで、本論考察の指標となる四つの観点、健康的な「甘え」と病的な「甘え」の区別、「甘え」の音韻における神話的起源、「甘え」がもつ生の意欲・非合理的な身体性・純粋な子ども性を浮き彫りにした。</p> <p>第一部においては、第一章で「甘え」の起源が母子間の感情から対人関係一般に拡張されることや、「甘え」が自他一致を目指す情緒的・非論理的心理にねざすことを明らかにし、第二章では「甘え」の語に先行する同根の形容詞「甘い」の語源的解釈と音韻・音声学的考察を通して、「甘え」の心理上の原型が乳児による乳や母への憧憬・現実界の美味への人間の感動・天上界への人間の感嘆賛美にあることを示し、第三章では先行研究にある「甘え」と関係のある一連の語彙のクラスター分析の結果を新たな視点から考察し、第四章で「甘え」概念の新たなコード化（双方向・一体感・依存・期待・自制）を行った。意味論の位置づけや語源解釈など今日の言語学上の知見を網羅できていない点は修正の余地があるが、先行研究をふまえ「甘え」概念の新たなコード化を示し得た点は評価に値する。</p> <p>第二部では、第一章で、「甘え」と自己愛や欲求としての愛との関係について明らかにし、第二章ではアイデアへと向かう上昇的なプラトンのエロースや下方へと向かうキリスト教的な与える愛アガペーに対する「甘え」の愛の双方性を、第三章ではアリストテレスの説くフィリア（友愛）が有する好意性・均等性・交互性・協和性・卓越性と「甘え」の親和性を、第四章では他者欲求が満たされないことによって生じる孤独感と一体感への欲求を伴う「甘え」の感情との類似性を指摘した。「愛」や「孤独」という哲学・倫理学の知見から「甘え」の構造を描出した点は評価に値するが、愛の理論の単純化によって各思想の多面的・重層的な内実や関係性が正確に記述できていない点に課題が残る。</p> <p>第三部では、日本の人間関係を倫理学的に解説する和辻哲郎の理論を取り上げ、その倫理的意義を「人間（じんかん）論」（第一章）、「間柄」論（第二章）、「生の哲学」（第三章）の視点から考究した。これらの考察を通して、個—社会、心—一体、人—自然、自己—他者、特殊—普遍を分断的にみる多くの西洋思想に対して、日本的な主客関係では、それらの分断が主体における普遍内在的な統一連関の内に解消・総合されることを指摘した。加えて、この見方に基づけば、「甘える—甘えさせる」関係</p>			

の内にも、個別の特殊意識が「間柄」的關係を介して具体的普遍を実現するという倫理的理法が確認され、この自立した相依關係としての「行為的連関」こそが日本の關係論の特徴であるとの主張は独創的で評価に値する。ただし、個の自立した相依連関をふまえた「甘え」をめぐる主体の変容過程（未分—分化—合一）を、和辻—ニーチェ論の構造の内に描き切れていない点が今後の課題といえる。

結章においては、知性の肥大化に伴う生の抑圧と心身問題に対して、それを解決する方途として、乳幼児期における周囲（母など）への存在信賴に加え、生の根源に根差す身体や意欲を介した大いなる実在への一体化という機能を有する日本的「甘え」の有効性が示された。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)